

平成17年度学芸員等在外派遣研修実地報告書

1 研修テーマ

フランスにおける地方美術館の活動：

フランスの美術館というと、ルーヴル美術館、オルセー美術館など、もっぱらパリを中心とした例外的な巨大美術館ばかりが想起されがちである。しかし、この国が首都以外にも、地方公共団体等に所属するおよそ1000館を超える美術館・博物館を抱え、各館が個性豊かな独自の活動を行っている点は、あまり注目されてこなかった。これらの館の中には、設立がフランス革命時まで遡る長い歴史を誇るものもあり、こうした点で、まさにフランスは、地方美術館の活動としても日本に先進する国であるといえよう。また最近の例では、私が大学院在学時代から研究を行っているジョルジュ・ド・ラ・トゥールというロレーヌ地方出身の画家の生地の方に、新たにその作品一点を所有する県立美術館が設立され、町の人口の十倍もの観客を動員しているケースなどもある。

私は現在ふくやま美術館という地方美術館に勤務する学芸員であり、今回の研修では、これら先進的なフランスの地方美術館の活動実態について学びたい。具体的には、

- ・ フランス地方美術館の組織体制，調査研究体制，作品保存活動，展覧会開催活動，教育普及活動，広報活動について。
- ・ ラ・トゥールの例に見られるような、「地方発の文化」の発信に、フランスの地方美術館の活動はどのように関与しているのか。
- ・ 地方と中央との協力体制はどのようになっているのか。

以上のような点について、当地の学芸員へのインタビューなども含めて調査を行いたい。

これからの調査の結果を、今後の日本の地方美術館のありかたを探る上での、一つの指標とすることがこの研修の目的である。

2 研修期間 平成18年 2月 26日～ 平成 18年 3月 18日

3 研修の概要

フランスの東部ロレーヌ地方および西部ブルターニュ地方に所在する、県立ジョルジュ・ド・ラ・トゥール美術館、ロレーヌ美術民族博物館、エピナル県立古代・現代美術館、ナント美術館などで研修・調査を行った。これらの各館で、主任学芸員、学芸員、ドキュメンテーション、教育普及担当などの方からお話を伺った。また私はフランスの美術館の研究活動の中で、特に日本の美術館では殆ど行われていないドキュメンテーションという活動に興味を抱いており、これを補完するために、ナンシー市立図書館、モーゼル県古文書館、ルーヴル美術館・資料室などでの調査を行った。

(1) 研修の内容

1 (1) 県立ジョルジュ・ド・ラ・トゥール美術館 (Musée Départemental Georges de La Tour)



(2) モーゼル県がフランス政府の援助を受けて画家ラ・トゥールの作品一点を購入し、その生地ヴィックに 2004 年に開館した美術館。ここでは主任学芸員デス氏にお話を伺うなどして、約 1 週間にわたり研修を行い、その活動を調査した。

現在、町の人口千 5 百人に対し、美術館には年間 1 万 5 千人と約 10 倍の来館者がある。ドイツ地域などから客層も多く、このため館内のキャプションは仏・英・独語の三ヶ国語表示になっている。広報活動としては、マスコミなどに対して、20 ページ近くもある詳細なプレスリリースを配布している。また、近隣の学校には数十種類のワークショッププログラムを記したパンフレットを配布しているため、その申し込みも多く、来館者の約 3 分の 1 が学校の生徒である。



研究活動としては、学芸課 (写真) に保存されているドキュメンテーションは、ラ・トゥール研究の第一人者、コレージュ・ド・フランス教授のデュリエ氏のものを引き継いでいる貴重なものであり、学生・研究者等の申し込みがあれば閲覧できるようにもなっている。また所蔵品目録作成にあたってルーヴル美術館のキュザン氏が参加するなど、中央との協力体制のもと、研究が進められている。

特別展は、年間約 2 回開催。いずれも、美術館のコレクションと関連のある展覧会であり、最低 2 年程度の準備期間がある。私が訪れた時は、ロレーヌ出身のフレアンという画家の展覧会の準備が進められていた。フランスでは特別展開催に当って、内外の研究者と協働するのが普通であり、この展覧会にもデス氏以外に、アメリカを含む 3 人の研究者が参加しているとのことであった。

私が訪れた中では最も小規模でスタッフも少ない美術館であったが、かつてフランス国立科学研究所や、文化省の顧問として勤務したデス氏の手腕もあり、中央、県、地域とも緊密な連絡体制がとられ、収集・研究・展示・教育普及ともにバランスの取れた質の高い活動が行われていた。

2 (1) ロレーヌ美術民族博物館 (Musée Lorrain et Musée des Arts et Traditions Populaire)

(2) 同館ではドキュメンタリストのパスク氏にお話を伺った。



同じロレーヌ地方にある美術館だが、県と国主導で設立された前述のラ・トゥール美術館とは性格が異なり、こちらは地域史の学会、「ロレーヌ考古学会」が同館の設立に深く関与している。特にガロ・ロマン時代に関するコレクションの多くは、この学会に由来する。また、学会には 100 年以上発刊の続いている『ロレーヌ誌』という学会誌があり、美術館のコレクションに関する学芸員または地域の研究者による研究論文もここに発表される。パスク氏によれば、地域学会と地方の美術館が協力体制をとるのはフランスではよく見られることではあるが、この美術館は特に緊密な例であるとのこと。しかし地域主導ではあるものの、『ロレーヌ誌』の刊行にあたっては国から財政的援助を受けており、作品の修復、展覧会活動に関しても規模に応じて国からの支援は受けているようであった。パスク氏は日本の美術館にはあまりいないドキュメンタリストという、作品に関する全ての資料を保存・管理する職務担当の方であった。これが所蔵作品の情報管理・研究の基礎になるので、地味ではあるが根本的で非常に重要な仕事であるとのこと。現在は所蔵コレクションのデータベース化を進めており、ここではそのデータベースやドキュメンテーションの保存などに



ついて調査を行った。

またパスク氏の示唆もあり、この後、『ロレーヌ誌』の全巻や地域研究書の多くを閲覧できるナンシー市立図書館、および地域研究の拠点となっている古文書館のひとつモーゼル県古文書館での調査を行った。

3 (1) ナンシー市立図書館 (Bibliothèque de Nancy)

- (2) 『ロレーヌ誌』ほか、多くの地域誌を開架式で閲覧できる。その他は閉架式だが、写本や貴重書を含む蔵書は全てデータベース化されており、パソコンで検索し受付で用紙に書いて申し込むと閲覧できるようになっていた。また許可を得れば、デジタルカメラで資料の写真を撮る事もできた。ここでは主に地域研究誌の調査を行った。



4 (1) モーゼル県古文書館 (Archives Départementales de la Moselle)

- (2) 『ロレーヌ誌』などの研究の基礎にもなっている古文書を保存している。文書は種類別に分類、リストが作成されており、外部からもインターネットで検索することが出来る。館内のパソコンで請求すると閲覧が出来る。



フランスでは、全ての公文書は市・県・国立などの文書館などへの保存が義務付けられており、小規模な自治体の場合でも委託などの形でこれを果たさなければならないとのこと。情報における中央集権化ともいえよう。これらが第一次資料として、研究のスタートになるので、余談に日本では相当な規模の地方都市でも、必ずしも文書館が整備されていないことを話すと、ではどこで資料が保存されるのかと驚いた様子だった。

5 (1) エピナル県立古代・現代美術館 (Musée Départemental d'Art Ancien et Contemporain)

- (2) 日本では、美術館と博物館は展示品においても研究上でもかなり異なったものとして組織されているが、本来の「Museum(Musée)」という言葉はその両方の意義を持つものである。実際フランスの「Musée」においては展示品が幅広い分野に渡ることがままある(もちろん日本の「美術館」に近い「Musée de Beaux-Arts」もあるが)。このエピナルの美術館では考古・民俗・絵画・現代ア



ートまでを扱っており、ある意味ではその典型例ともいえることから、研修先として選択した。

同館では所蔵の民族資料だけで膨大な数に上ることからその分類・保存が続いており、その様子を学芸員フェビアン氏に見せていただいた。

また館ではこれらの所蔵品に関連し特別展を開催し、高い評価を受けているとのこと。なおフランスでは、各館のコレクションを補完・拡充するために、作品購入や寄贈以外にも、ルーヴルなどの国の美術館や、他の地方美術館からの作品の委託、あるいは政府の基金(例えば主に現代美術を扱う **Fond national d'art contemporain** など)の買い上げによる寄託、など様々な手段があるそうである。同館でも、17世紀の地域出身の有名作家などの作品の寄託を受け、展示していると伺った。



6 (1) ナント美術館 (Musée de Beaux-Arts, Nantes)



(2) ナント美術館のコレクションの多くは、同地出身の外交官の個人コレクションに由来する。イタリア美術などでは特に秀逸なものがあり、日本でも過去にその所蔵品の巡回展が行われているほどである。ここでは学芸員ギュイ氏にお話を伺い、収蔵庫、およびドキュメンテーション室などを見せていただいた。後者は2室あり、作品ごとにファイルが作成され、購入

時の記録、出展交渉の手紙、論文など、作品に関する資料が全て分類・保存されていた。また館では、現在もコレクションの拡充が進められおり、ナント美術館は市立であるが、その場合には、市の購入以外にも、友の会の購入、個人の寄贈などに加え、地域の財団からの寄贈、国や国の財団からの寄託など、様々な方法がとられているとのことだった。

7 (1) ルーヴル美術館・資料室 (Musée du Louvre)



(2) フランスの美術館のドキュメンテーションシステムの総本山ともいえるルーヴル美術館の資料室で調査を行った。膨大なコレクションを誇る同館だが、資料室では、絵画に関しては作家ごとに資料ボックスが作成されていた。この中には、過去にその作家を扱ったカタログや論文のコピー、作品にふれた新聞・雑誌の記事のコピー、外部からの作品への問い合わせやそれに対する学芸員の応答の手紙のコピーなど、およそありとあらゆる作品に関する情報が全て保存されている。また基本的には身分証明だけで無料で閲覧出来るシステムになっていた。

(3) 研修の成果

今回多くのフランスの地方美術館を訪ね、その多彩な活動について知る事ができた。また地方美術館が、国や、地域の学会などと緊密に連携し活動している様子を理解できた。特に、ラ・トゥール美術館の場合のように、地域の画家に関する美術館でも、作品獲得に県や国が協力して取り組む体制や、エピナルや他の地方美術館の場合のように、コレクション中に地域作家の秀作がない場合、国から作品の委託を受けるケースなど、フランスでは地域の文化の発信にあたって、背後に国家の統一的な文化政策や支援があることは大きな驚きであった。

しかし一方で、フランスでは、必ずしも地方美術館が主として地域出身の芸術家の作品の収集や展覧会開催を行わなくてはならない、とは考えられていないということも多く聞かれた。というのは、美術館の活動はあくまでも、そのコレクションに添って行われるべきというのがその原則となっているからである。コレクションに地域出身の画家の割合が高いのは当然の帰結であって、もしそこに加え得るような地域作家がいなければ、美術館の活動は地域の枠に縛られる必要はないというのが各館共通する見解であり、あくまでコレクション中心の柔軟な姿勢が取られていた。また展覧会準備活動に関しても、例えばロレーヌ地方の画家の研究について米国の研究者と協力するなど、これも地域の枠にはとらわれず、専門にそって自由に連携を組む体制が伺えた。これらは参考にすべきことかと思う。

また、展覧会などの表向きの活動の一方、膨大なコレクションの整理・保存活動やデータベース化、作品に関するドキュメンテーションの作成などといった地道な基礎的な作業も、精力的に行われていた。特に作品に関する全ての情報を分類し保存しておくドキュメンテーションは、美術館の歴史とともに形成されていくものであり、美術館の研究・保存活動上、非常に重要であるが、短期的に

は何らの経済的利益にはつながらないものである。こうした活動が、多くの地方美術館でも継続的にきちんと行われ、外来の学生や研究者は、所定の手続きさえ踏めば、この時間と手間の結晶である貴重な資料を無償で閲覧できる。こうした「知の集積」また公衆に対する「知の公開・共有化」には、文化の国のフランスの底力を見る思いであった。